

あけのほし 2015年11月

「愛着を回復する」(2)

菊田行佳

「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。」

(ヨハネの手紙I 4章18節)

44歳になって、初めて真剣に自分の健康のことを心配するようになりました。このまま不摂生に過ごしていれば、仕事の効率も上がらないし、糖尿病などの成人病にかかるのも時間の問題だとようやく重い腰を上げて、健康を回復して集中力と持続力を取り戻そうと取り組み始めました。すると、今まで考えたこともない、私たちを取り巻く危険がたくさんあることに気がつきます。パンに塗るマーガリンは、トランス脂肪酸という人体では処理しきれない油が使われているということに衝撃を受けたところから始まり、添加物や合成化学調味料がいかにか体や味覚を壊しているのかとか、気になりだしたら水道の水さえも発ガン物質が含まれているとか言われることも、気になります。

自分でも少し極端に触れすぎているとは思いますが、しかしわざわざ危険を犯してまでそれらの食物を食べなくても、少し気をつけて安全と考えられるものを選んで食べることで、病気になるリスクを減らせるならばと取り組んでいます。こうなってくると、どうして今までこうも無頓着だったんだろうと思うわけですが、悪い意味で社会を信用しすぎていたということでしょう。そんな危険なものや害になるものが普通に売られているなんて。しかし、食品業界の裏事情を告発する本が沢山出てきていますが、そこには企業が利益を追求して合理化を進めるあまり、安全や手間暇かけて得られる本来の味を失っていることが、よくわかります。製造工場で製品を作っている人々は、自分や家族には食べさせないものを、消費者に提供しているとのことです。これが本当だとしたら、私たちの住む世界をそのまま信用することはできませんし、いったい何を代償にして、何を得ようとしているのだろうかと考えさせられます。

この合理化や効率を追求する社会の姿勢は様々なところにも及んでいて、教育の現場やそして社会を形作っている最も基本的な単位としての家族の中にも入り込んでいることが指摘されています。イスラエルのある集団農場キブツで、子育てをもっと効率よく行う方法はないかと考え出され、一人の母親が一人の子どもの面倒をみるのは無駄が多いと結論に達しました。そして複数の親が時間を分担してみれば、効率が良いし、親に依存しない、自立した子どもに成長するだろうと考えました。しかし、結果はというと、当初考えていたようにはならず、そのように育てられた子どもたちは、重大な問題が生じやすいことがわかったのです。彼らは親密な関係を持つことに消極的になったり、対人関係が不安定になりやすく、さらに彼らのその次の子どもの世代になると、周囲に無関心で、何事にも

無気力な傾向が目立つということになりました。

私は以前児童養護施設に勤めていましたのでよくわかりますが、養育者が複数で関わったり、コロコロと変わると愛着が十分に形成されずに、様々な問題行動を起こすようになり、しまいにはかえって自立できない不安定な状態に育ってしまいます。ですから、今ではなるべくグループホームなど少数での居住空間の中で、安全に守られ、特定の養育者が長く安定的に関わるような体制作りを求めているようになっていきます。大人数の子どもたちを、大人数の大人たちで面倒をみるより、少数で、少人数の子どもたちと深く、長く関わる方が、かえって良く子どもが育つことが、経験的にわかっているのです。

効率や合理化を求めすぎると、かえって本質的な事柄を失ってしまうという良い例ですが、私たちの施設でもそのことに気がつき、それまで学童期の子どもたちと幼児を分けたクラス編成から、幼児から高校生までの縦割りのクラスへと変えました。幼児一人がくるということは、大変な手間がかかることで、小さい子どもに養育者は振り回され、当初これは失敗だったかと思いました。しかし、長い目で見たとき、その小さい子が安定した愛着を形成して行くことで、学童期になっても問題を起こさず、「これがうちの施設とは思えない！」というような、落ち着いた生活空間を徐々に作っていったのです。そして、そこには思わぬ副産物も沢山ありました。それまで、離職率が高いのが当たり前で、3年勤めればベテランになるという児童養護施設の常識を覆し、職員が長く勤めるようになりました。また、学童期の子どもたちも、職員が幼児に手を取られるので、それまで過干渉的に監視されていたような状況が変わって、自由にのびのびと自立して行く生活の場となったのです。

私が牧師として、理事として関わらせていただいているシオン幼稚園も、少人数の子どもたちに、少人数の養育者が関わることを大切にしています。それは、母親を中心とした特別な存在との絆の結びつきを最も尊重しているところから来ています。その子にとって、他の人には変えることの出来ない、特別な選ばれた人間こそ、最も必要な、見えない絆を結ぶことが出来ます。その特別な固有の関係が結ばれて初めて、自立して行く土台が形成されるわけです。「安全基地」としての愛着関係を、母親やご両親、そして家族の方々に準じて、徐々に広げて行く場として、幼稚園などの場が提供されます。そのいつも守ってもらえるという安心・信頼の場から、子どもたちは、少しずつ、外に向かって冒険をして行きます。また、お母さんの手作りお弁当というのもシオン幼稚園は大切にしていますが、これも栄養素だけが体を作るのではないと考えているからです。心の成長だけでなく、身体的な成長にとって、成長ホルモンや免疫力、神経伝達物質を活発（脳の成長）にするのも、愛着の絆だということがわかってきています。

今回は、愛着の絆を人間関係の背後から支えてくれる「信仰」という側面から述べたいと思います。この私たちの世界を、本当の意味で信頼するために、欠くことの出来ない事柄を皆さんと共に考えたいと思います。